

2014 年度前期 学生授業評価アンケートの集計結果に対するコメント

—文芸学部—

文芸学部長 戸部 順一

今回の授業評価アンケートは 163 科目を対象に実施され、そのうち実施必須科目（119 科目）は 100%の回答率であった。この種のアンケートに対する重要性が各教員に十分に認識されている結果だと、歓迎したい。また、延べ履修者数に対する延べ回答者数の割合が 76%にのぼっている（昨年と比較して 2 ポイントの上昇）のも設問 1 の「この授業によく出席した」に対して 80%以上の出席であると回答した学生が 91.5%であるのとほぼ合致する数値であり、学生側の回答に対する真摯な姿勢が見て取れ、これも歓迎する次第である。さて、各設問に対する平均値を昨年度前期のそれと比較したとき、ほぼ同値であるとの結果を得た。特にアクティブラーニングとの関連が指摘できる設問 9 の「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」の平均値が昨年と比較し 0.12 ポイント上昇したのは（4.12→4.24）、成城大学の教育方針に沿った授業が行われてきたことの証左であると考えられ、これもまた歓迎したい。後期アンケート調査の集計結果と比較すると—これは例年のことではあるが—平均値は若干落ちる。新しい授業に対し学生が不慣れであるというのも、その理由の一つとして挙げられよう。後期の集計結果で数値が改善されていることを望む次第である。各設問の平均値はどれも 4 ポイントを超える結果であったが、設問 6 の「この授業のレベルはあなたにとって適切であった」が平均値 3.99 と 4 ポイントを達成できなかった（それでも、昨年よりは 0.03 ポイントの改善は認められる）。学生の力量を速やかに把握する方策が考えられるべきかもしれない—この平均値が後期になると上昇するのというのも、これまでの傾向ではある。

各設問の平均値から、文芸学部の開設科目は受講生にとって概ね好評であると判定してよさそうであるが、我々教員はこの結果に満足することなく、さらなる授業改善に取り組むべきであり、その努力を怠らぬことこそが、各設問に回答してくれた学生の期待に応えることにつながるのを忘れてはならないだろう。